

外国語学習において発音を学ぶ意義とは

— 8 人の語学教師のインタビューから —

服部真子（関西外国語大学）

shinkohattori@gmail.com

【要約】

本研究は、PAC 分析で取った 8 人のインタビューから発音を学ぶ意義を取り出し、研究を行ったものである。分析から、発音学習をする意義は次の 5 つの要素に分けられた。①対話の成立に関する要素、②聞き手に与える影響、③個人の内面的要素、④現地の人との関係構築、⑤社会的統合。教師が学習者を動機づけるなど、教室の実戦にも役立つよう、発音の問題がどのような問題に結びつくかなど、具体的なエピソードも含めて意義を明らかにした。今後、教室実践の現場で発音指導の際の情報の 1 つとしての役割を果たすことも本稿の目的である。

1. はじめに

コロナ禍でオンライン授業やオンライン会議が増え、以前とは異なった形で口頭コミュニケーションの重要性が高まってきている。また、インターネットも発達し実際に海外に行かなくても、グローバルにコミュニケーションを取ることが可能である。仕事や学業でもグローバリゼーションにより、口頭でのコミュニケーションの重要性も今まで以上に高まっている。総合教材の中でも、テキストと連動したアプリなどで発音が確認でき、必要性に応えようとしている動きは見られるようになってきている。しかしながら、発音のために授業で継続的にさらに時間を取るのには難しいのが現状ではないだろうか。本研究では外国語学習において、発音を学ぶ意義は何かという基本に立ち返って考えてみたい¹。

2. 先行研究

戸田（2008）では、発音が体系的に継続的に扱われておらず、発音が授業で取り上げられるかは、担当している教師にゆだねられている状態である、と述べられている。また、千（2017）では、教師が実践的な知識を身につけるだけでなく、教師自身が発音教育の必要性を実感し、目的意識を持たなければならないと述べている。このことから音声教育における教師の役割の重要性がわかる。そして、教師が果たす役割としては、須藤（2013）では、学習者が自律的に、発音学習を継続できるようにするためには学習者へどうして発音を学ぶ必要があるのかという動機づけが必要であり、教師は音声学知識と学習者の習得との橋渡しの部分になる必要があると述べている。

中川・長松谷・坂井・服部（2020）で行った語学教師への外国語学習者としての経験、語学使用経験を聞き出したインタビューでは、発音が伝わりにくいことによる不利益についても多く語られていた。また、土岐（2010）でも、教師は、発音が原因で、学習者が将来被るかもしれない不利益につい

¹ 本研究は中川純子さんが中心となって行ってきた共同研究を発展させたものである。共同研究者の長松谷有紀さんと、坂井菜緒さんにも、この研究を発展させることについて同意をもらっている。

て、予測して指導する必要性があると言及している。しかしながら、教師は学習者をどのように動機づけるか、学習者は将来どのような不利益を被るのかという具体的な議論はされていない。実際に教育を行う教師がどのように学習者を動機づけるか、学習者が将来どのような不利益を被るかなどの具体的な情報を持っていなければ、教師自身も、どのように教師の役割を果たすべきかわからず、学習者への指導も難しい。

3. 目的

発音教育を行う教師が、どのように学習者を動機づけるか、将来どのような不利益を被るかなどを具体的にするため、根本的な部分に戻り「発音を学ぶ意義」を明らかにする必要があると考える。今回は8人の語学教師のインタビューの発言から、発音を学ぶ意義について明らかにする。

4. 被験者について

今回の被験者を語学教師にした理由は、被験者の教師としての発音に対する意識を探ることができるだけでなく、自分自身も外国語を学んだことがある学習者の一人でもあるからである。教師としてだけでなく、学習者としての振り返りもしてもらうことで、幅広い視点から発音を学ぶ意義が導き出せると考えた。教師プロフィールは表1の通りである。

表1 教師プロフィール

教師	居住地	母語	教えている言語	教えている機関	教育歴
A	ドイツ	ボスニア語	ドイツ語	高校	約5年
B	ドイツ	アラビア語	ドイツ語	語学学校	約5年
C	ドイツ	マジャール語	ドイツ語	語学学校	約20年
D	ドイツ	ドイツ語・日本語	日本語	大学	約10年
E	台湾	日本語	日本語	語学学校・個人レッスン	約25年
F	日本	日本語	日本語	語学学校・大学	約15年
G	日本	日本語	日本語	大学	約20年
H	日本	日本語	日本語	大学	約20年

今回の使用したインタビューのスクリプトは、AからHまでの8人の語学教師のものである。表1の教師A-Cの3人は、ドイツでドイツ語を教えているノンネイティブの教師²である。また教師D、Eの2人は、海外で日本語を教える教師である。教師F-Hの3人は、日本で日本語を教えている教師である。

5. 方法

今回は、PAC分析（個人別態度構造分析 Analysis of Personal Attitude Construct）を使用した。PAC分析は、社会心理学者で臨床心理でも内藤哲雄の開発したインタビュー分析手法である。内藤(2002

² 出身国は、教師Aはボスニア、教師Bはスーダン、教師Cはハンガリーである。

p. 11)によれば、個人を研究することは、個別的普遍性だけでなく共通的普遍性の解明をも目指すことになるという。インタビューの意図や影響を極力抑えた形で深いところまで内省を促す手法であることから本研究の趣旨に最も適格な手法と考えた。

PAC 分析の手順は、次の通りである。1) 刺激文³を提示し、被験者に連想語を書き出した。なお本研究では、日本語を母語としない教師については、刺激文はドイツ語で提示し、連想語はそれぞれの母語で出してもらった。2) 被験者が連想語を重要度順に並べ替えた。3) 被験者が連想語のそれぞれのイメージの近さを評価した。4) 調査者がデンドログラム（樹形図）を作成した。5) 被験者に連想語の 1 つ 1 つのイメージを聞き、クラスター（以下 CL）間の関係を語らせ、被験者が仮の CL 名をつけた。6) 調査者は、聞きながらメモをとり、インタビューは全て録音した。7) インタビュー後に、全てを書き起こし、日本語以外は中川がドイツ語から和訳した。中川と服部が共同で、情報整理、総合解釈、分析により、各 CL に命名した。

今回の 8 人のそれぞれのインタビューデータは、それぞれの論文にまとめてある。ドイツでドイツ語を教えている 3 人分（教師 A、B、C）は、中川・服部（2022）の論文で、また海外で日本語を教えている教師 2 人分（教師 D、E）は中川・服部・長松谷・坂井（2021）の論文で、日本で日本語を教えている教師 3 名分（教師 F、G、H）は中川・長松谷・坂井・服部（2020）の論文でまとめてある。

今回の研究は、今まで行った PAC 分析によって取ったインタビューの中に、発音を学ぶ意義について有意義な内容が多くあったため、PAC 分析の結果をさらに発展させて、研究を行ったものである。8 人のインタビュースクリプトを分析し、個人の枠を超え、8 人分をまとめ、意義を導き出した。

今回の分析の手順は、次の通りである。1) PAC 分析で使用したスクリプトから、発音学習の目的や意義に関わる発言だけを取り出し短冊状にした。2) 教師の枠を超えて、内容が近いものをまとめた。3) さらに似た内容の短冊を下位分類した。4) 最後に、意義という観点から見出しをつけ、5 つの要素に分けた。

6. 結果

スクリプトの分析から、発音学習をする意義は、次の 5 つの要素に分けられた。①対話の成立に関する要素、②聞き手に与える影響、③個人の内面的要素、④現地の人との関係構築、⑤社会的統合である。それぞれ 1 つずつ見ていくことにする。

5 つの要素の 1 つ目の「対話の成立に関わる要素」について、表 2 に示す。[] のものは、下位分類でまとめたものである。対話に関わる要素として、4 つの下位分類をした。

表 2 対話の成立に関する要素

①対話の成立に関わる要素
[1] コミュニケーションが崩壊しないように
[2] 誤解されない/意思を伝えるように
[3] 言語総合力を高めるため
[4] 時間の短縮とストレスの軽減

³ 提示刺激文は「外国語教育にとって、発音学習の目的や目指す目標は何ですか。教師として、また学習者としてのあなたの経験はどうですか。」である。

「対話の成立に関わる要素」の中の1つ目は、「コミュニケーションが崩壊しないように」するためである。教師 C は、「発音に問題があれば、何を言っているか全然かわからないことがあるため、文法の間違いより発音の間違いの方がコミュニケーションに問題になりうる」と述べている。

また、2つ目の「誤解されない/意思を伝えるように」というのは、コミュニケーションの基本である。教師 E は、「発音が正しくなければ、相手もその意味がわからなかったりとかして、それが誤解の元になったりする」ことがあると語っている。教師 G は、「発音で気持ちや人格も表す。個性とかも表す。」自分が怒っている時は、怒っていると「外国語で感情表現することは難しい」が、「それを理解しないと真のコミュニケーションは難しい」と述べている。また、自分の学生の中にも、「誤解されちゃうんじゃないかという発音、ぞんざいな印象を与える発音」の人もいると語っていた。

3つ目の「言語総合力を高める」というのは、発音の問題を少なくすると言語パフォーマンス全体のレベルアップに貢献するということである。教師 B は、「発音を直すことによって、相手に事実関係が正しく伝わるだけでなく、人間関係も円滑にいく可能性もある」と述べている。また、中国語圏在住の教師 E は、発音学習はただ音を発音するだけでなく、音を聞いて漢字が思い浮かべることができ、漢字と音が一致する訓練の場であるのではないかと述べていた。発音は、様々なことに連動しており、4技能の総合力に関係していることが、教師達のコメントからわかる。発音を良くしようとすることは、他の技能も高めることになる。

4つ目の時間の短縮とストレスの軽減というのは、発音に問題がなければ、コミュニケーションに無駄がなく、双方にとって時間とストレスの軽減につながるということである。教師 C は、「わかりやすく話せば、聞き直すという時間のロスはない」と述べていた。また、教師 E は、「中国語」は「四声があったりして、その四声が違ふと」違ふ意味になってしまうために、「自分が言おうと思っていたことが相手に誤解されてしまうこと」があり、そのため「相手に正しく理解してもらえない」と語っていた。

5つの要素の2つ目の「聞き手に与える影響」について、表3に示す。聞き手に与える影響とは、聞き手が発音によってコミュニケーション上で様々な影響を受けると言うことである。

表3 聞き手に与える影響

②聞き手に与える影響
[5]話の内容に集中する a) 出身を詮索されないように b) 発音は話の内容より目立つべきではない
[6]聞き手にいい印象を与えるため a) 発音は第一印象を作る b) 聞き手に不快な思いをさせないように

5つ目の「話の内容に集中する」というのは、発音に問題があれば、話の内容に集中することができないということである。教師 A は、「話し始めると直ぐにどこの出身か詮索が始まる」と述べている。教師 B は、「アクセントが強いと、この人はどこから来ているのだろうかなどと余計なことを考えてしまう」と語っている。教師 F は、発音が聞き取りにくければ「話の内容に集中できない。頭の中で、この意味は何だろうと考えないといけないプロセスがあるので、話が止まってしまう」だけでなく、

「話も深くならない」ように感じると述べていた。逆に、発音がきれいであれば、内容に集中できる。また、学習者の発音が自然であれば、「日本語も上手というイメージを持たれる気がする」が、発音に問題があると、聞き手の方も「無意識に内容もわかりやすい内容に変えている可能性がある」と語っていた。発音が目立つと、話の内容に集中できない可能性を示唆していると言える。

6つ目の、「聞き手にいい印象を与えるため」というのは、発音は相手に対して第一印象を作ることである。教師 C は、「発音が聞き取りやすければ文法の間違いも気にならなくなる」と語っていた。また、教師 E は、発音によって語学能力の評価が左右される傾向にあると述べている。教師 B は、発音が聞き取りにくいと、話すたびに相手の内容を確認しなければならないため、疲れてしまう。また、相手の話の内容がわからなければ、会話を続けるためには仕方なく聞き直し、自分の理解と相手が言いたいことが合っているか確認しながら会話していく必要があると述べている。教師 C は、「間違ったイントネーションをずっと聞いていると耳が痛くなる」と語っていた。このように発音は、聞き手の印象と結びつきやすく、人間関係の構築のためにも発音の果たす役割は大きいということである。

5つの要素の3つ目の「個人の内面的要素」について、表4に示す。個人の内面的要素とは、発音が話者の内面に与える影響の大きさについてである。

表4 個人の内面的要素

③個人の内面的要素
[7] 不当な不利益を受けないように
[8] 不安にならないように a) 自信を持って話すため b) プライドを守るため c) アイデンティティーを守るため

7つ目の「不当な不利益をうけないように」ということは、発音によって、聞き手に事実とは異なる不本意な印象を持たれる可能性があるということである。教師 A は、発音が聞き取りにくいと「その人はその言語を学ぶ気がない人」、「努力をしない人」と思われ、「言語能力が低い人だと思われる」可能性すらあると述べている。教師 C も、「しっかり発音をすると、しっかり教育を受けた人だと思われる」と語っている。教師 F は、海外のドライブスルーでオーダーをした際に発音が聞き取ってもらえず、逆に「もっと勉強してから来い」と暴言を吐かれたことを語っている。

8つ目の「不安にならないように」ということは、学習者が発話することへの不安につながらないよということである。教師 D は、発音の「自信の無さ」が、自分の自信の無さにも繋がると述べており、日本語が「正しく」発音できないと「恥を感じ」たと思ってしまうと語っていた。教師 E は、話している時に「聞き返されることは」、自分の発音が「間違ったんじゃないか」と「不安感をもたらす行為だ」と述べている。小学生5年生まで、海外の現地校に通っていて教師 D は、日本に戻ってきた直後の頃にある単語の発音が上手にできず、クラスメイトに笑われ「すごく嫌な思いをした」経験を語った。発音の問題は初級の学習者のみならず、「ある程度」不自由なく話せる「レベル」になっても生じることであり、一度の経験が「トラウマ」になることさえあると語っている。日本語の発音を指摘されることにより、自分は日本人ではないのではないかと感じてしまったという。自信、自

分自身のプライド、さらにはアイデンティティーの問題にも発音は大きな役割を果たしていることがわかる。

5つの要素の4つ目の「現地の人との関係構築」について、表5に示す。現地の人との関係構築とは、発音が障害となって、聞き手の方から距離を置かれるという問題である。

表5 現地の人との関係構築

④現地の人との関係構築
[9]聞き手に距離を置かれないように
[10]聞き手の努力に頼らないように

9つ目の「聞き手に距離を置かれないように」というのは、教師Bが語っていたが、外国人と交流した経験の少ない人たち、あるいはあえて積極的に外国人と交流をする必要を感じない人たちにとっては、「聞き取りに努力や忍耐力を要するコミュニケーションは面倒に感じるため、距離を置かれる可能性がある」という問題である。教師Gは、留学生と日本人が一緒にいるクラスでは、留学生が「非常に不自然な発音」だと日本人の学生に「面倒くさいと思われ」、クラスメイトに聞いてもらえなくなることがあるだけでなく、「人間関係を広げていく上で、友達が作りにくい」などの支障が出てくる。つまり相手が聞き取りにくい発音は、共同体の一員として現地に溶け込むことを難しくしていることになる。

10個目の「聞き手の努力に頼らないように」というのは、教師Bが語っていたが、「聞き手が自分を理解するために努力することを当てにしてはならない」ということである。現実には聞き手の誰もが努力を惜しまないわけではない。教師Cは、「聞き取りに相当集中しなければいけば、聞き手はかなり疲弊してしまい、教師なら聞き取ろうと努力をするが、一般の人であれば、去っていつてしまう」と述べている。また、教師Eは、自分が何度も聞き返されて嫌な経験をしたことから、相手が何を言っているのか分からなかった際に、自分が相手に「何度も聞き返す」のは悪いと思ってしまおうと述べていた。つまり、聞き手がかなり努力しなければ会話が成立しないのであれば、聞き手に相当の負担を負わせているということである。

5つの要素の5つ目の「社会的統合」について、表6に示す。社会的統合とは、暮らしている社会へ統合され、地域や共同体の一部となることを指す。

表6 社会的統合

⑤社会的統合
[11]社会への統合
[12]社会での将来のため
[13]生活の質を上げる

11個目の「社会への統合」というのは、その社会に溶け込むということである。教師Aは、社会に溶け込もうと思ったら、方言も含め、「その社会で話すように話さなければならず、その地域の一員になるには、その地域の人にもそれを望んでいるだろう」という信念を述べている。教師Fは、相手に

聞き取りやすい発音ができなかったために、「外国人」として距離を置かれた自分の体験を語っている。教師 H は、「せっかく日本で日本語を勉強している」のに、「そこに住んでいる人とコミュニケーションが取れないのは悲しい」と語っており、円滑なコミュニケーションには発音の果たす役割は大きいと述べている。

12 個目の「社会での将来のため」というのは、社会に溶け込んで暮らすことは、その社会で将来を作っていくことが必要であるということである。教師 A は、発音は「その社会の中で生きていくために、かなり重要な役割を果たしている」と述べている。社会の一員となるため、そしてその社会の中で生きていくためには、「その社会で話されているように話す必要があり、自分の学生にもそう伝えている」と述べている。教師 G は、クラスでプレゼンをした学生が、発音の問題で何が言いたいか分からなかったという経験から、就職や面接などでの正式な発表であれば人生を左右しかねないと述べていた。また、留学生は自分の発音に自信がないと「萎縮して」しまい、日本人に積極的に関わろうとせず、もったいないと思った経験談を語っていた。

13 個目の「生活の質を上げるため」というのは、その社会に溶け込んで暮らすことは、結果的にその地域での経済生活、人間関係など生活全般の質を上げていくことにつながる。教師 F は、「発音がもっとよければ、海外での生活が楽だったのではないかと語っていた。旅行などの短期間の滞在ではなかなか感じることはできないが、そのコミュニティに入り、実際に生活をした教師からは、発音の重要性を感じたという発言が多かった。

先行研究では、教師が果たす役割が大きいと言われており、教師が学習者を動機づけ、学習者が将来被るかもしれない不利益に備えるべきだと述べていたが、今までそのような具体的な議論がされていなかった。今回、「動機づけすべきこと」や「将来の不利益の内容」が 5 つの要素で明らかになった。具体的なエピソード⁴もインタビューから出てきたため、学習者に説明する時に説得力を持って動機づけることができると思われる。発音の問題は様々な社会の問題と関連しており、議論が難しい面があるが、関心を持つことにより発音学習もより充実したものになると考えられる。

7. 今後の課題

今後の課題としては、今後、今回の 8 人の大量のスク립トの具体的なエピソードをさらにまとめ、多くの人々と情報を共有できればと思っている。今後も、発音学習の意義について、多くの人から具体的な体験談などを聞き、研究を続けていければと思う。

今回の研究の結果から、いかに自然な発音を身につけるかという問題だけでなく、いろいろな意味で、発音について考えていくことは重要であることがわかった。しかしながら、実際の授業ではカリキュラムなどの関係上、なかなか発音に時間をさけない状態であると思われる。そのような状況でも、発音学習ができるように、2020 年に発音学習サイト「ラズベリー⁵」を立ち上げた。このサイト設立の目的は、オンライン授業でも使用できること、そして授業で時間が割けない場合、ゼロレベルの学習者でも、一人でもここで発音を学ぶことができるようにということである。

このサイトでは、多くの教育機関で使用されている教科書の「GENKI」と「みんなの日本語」の単語を扱っている。「GENKI」と「みんなの日本語」にも音声教材はあるが、このサイトではさらに発音の

⁴ 細かいエピソードについては、5 方法の中に書かれているそれぞれの教師について書かれた論文を読んでもらいたい。

⁵ globaljapan.net

高低アクセントを視覚化し、再生のボタンを押すと発音が聞けるようになっている。またローマ字表記もしており、日本語能力を問わず使えるようになっている。また、GENKI と「みんなの日本語」の教科書を使用してない学習者にも使えるように Index も作り、始まる言葉で検索できる機能をつけた。Index であれば、教科書の課などに関係なく、使用することができる。学習者はもちろん教師にも、語彙導入時やカテゴリーごとにもページがまとまっているので使用していただければ幸いである。また今後も、フェイスブック、ツイッター、インスタグラムなどで発音に関する情報を発信していく予定である。

参考文献

- 須藤潤 (2013) 「日本語音声教育における動機づけの意義とその可能性—「学習者間の協力」に関する事例的考察—」『コミュニカーレ』2 号, 43-70.
- 千仙永 (2017) 「日本語音声教育の変遷・課題・展望—日本国内における教師教育に着目して」『早稲田日本語教育学』第 22 号, 41-60.
- 土岐哲 (2010) 『日本語教育からの音声研究』ひつじ書房
- 内藤哲雄 (2009) 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]』ナカニシヤ出版
- 戸田貴子 (2016) 「日本語教育における学習者音声の研究と音声教育実践」『日本語教育』142 巻, 47-57.
- 中川純子・服部真子 (2022) 「学習者の将来につながる発音教育のあり方とは—PAC 分析を用いたドイツで教える非母語話者ドイツ語教師のインタビューから—」『ドイツ語教育 (ドイツ語教育部会会報)』26(74), 44-64.
- 中川純子・長松谷有紀・坂井菜緒・服部真子 (2020) 「日本語教育における発音学習の意義—3 人の教師の PAC 分析インタビューによる内省から—」『PAC 分析研究』第 4 巻, 27-37.
- 中川純子・服部真子・長松谷有紀・坂井菜緒 (2021) 「外国語学習において発音を学ぶ意義とは—海外で働く日本語教師の PAC 分析インタビューから—」『日本語教育会議論文集』第 33 巻, 145-155.
- ラズベリー日本語 <<https://globaljapan.net>> (2022 年 12 月 21 日)